研 究 論 文

生活主義の原理に基づく幼小接続期の音楽学習
－教師用指導書『初等学校音楽のための手引き』を中心として－

荒巻　治美*

Music Learning for Preschool-Elementary School Cooperation based on the Principle of Empiricism
：Focusing on Teachers Guide to Music in the Elementary School

Harumi ARAMAKI*

【要約】
本研究は，1960年代カリフォルニア州の音楽学習のために編纂された教師用指導書を分析することによって，幼小接続期における音楽学習の在り方について考察した。それは，生活主義の原理に基づきながら幼稚園から初等教育にいたるまで，音楽的成長を促すような統一的な学習の内容と方法を提案していた。幼小接続期では，子どもの発達段階に即しながら生活と直接的に関わる学習が連続的に展開されていた。幼小連携において最も問題とされる音楽的知識と技能の習得については，音楽に関わる活動を意欲的に行った成果とされ，意図的計画的に組織されなかった。何よりも生活における音や音楽の位置や機能を感受すること，音や音楽に対して反応することが重視された。子どもは，音楽に関わる全ての活動の在り方について知り，それを行うことが求められた。指導書で提案された音楽学習の内容と方法は，幼小接続をめぐる問題に対して，一つの示唆を与えるものとして評価できるのではないだろうか。

【キーワード】
幼稚園，幼小接続期，音楽表現

１．はじめに

アメリカにおいて音楽科は、1920年代以降経験主義・生活主義の原理のもとで展開する。初等教育を中心として先進的な大学附属実験学校で様々な教育実践が行われ、優れた音楽教育思想家により教科書が構想・出版され、それらの研究成果を背景として各州での学習が組織された[1)]。音楽教育史研究では、これらの事実についての解明は進められているが、幼児期に関してはあまり対象とされてこなかった[2)]。一方、一般教育研究では、世紀転換期以降、幼小連携の観点から幼稚園教育の内容と方法の組織について、「幼稚園を学校化」するのか、あるいは、初等学校を「幼稚園の内容を延伸する」形で組織するのか、様々に議論され構想されてきた[3)]。このような問題状況の中で、音楽科では，幼小連携をどのように捉えて学習内容を構想し実践していきたのか,その歴史的事実の一端を明らかにすることを目的としている。

「カリフォルニア・プログラム」で知られるカリフォルニア州は、生活主義の原理に基づいた音楽教育開発を継続的に行い、様々な成果をあげてきた[4)]。その一つとして、カリフォルニア州が1960年代に出版した『初等学校音楽のための手引き（*Teachers Guide to Music in the Elementary School*,1963）』[5)]

＊佐賀大学教育学部

がある。それは、幼稚園から初等教育に至る教育過程を連続的に捉え、そこでの音楽学習の内容と方法、それを貫く理念を明らかにしている。本研究では、幼小接続期の教育課程全体における位置と学習指導の在り方について考察する。

２．指導書の内容構成

指導書は，「カリフォルニア州音楽教育者団体（California Music Education Association）」と「カリキュラム開発と管理のためのカリフォルニア州音楽委員会(Music Committee of the California Association for Supervision and Curriculum Development)」との合同委員会によって構想・編纂され、カリフォルニア州教育局から出版された。委員会は、州全域から選抜された音楽指導主事や教師、大学の音楽教育研究者などから構成されていた。学年段階を１)幼稚園と第１・２学年、２)第３・４学年、３)第５・６学年、４)第７・８学年の四つに分けて、それぞれの学習指導の在り方を構想し、使用すべき音楽教科書を選定した[6)]。指導書では、音楽学習を指導するにあたっての留意点について、次のように述べている。

「委員会は、音楽を通して自己を表現すること、音楽を学ぶこと、これらに関する全ての機会を子どもに与えるようなプログラムを作る。」[7)]

「音楽はコミュニケーションのための聴覚の芸術である。」[8)]

「芸術としての地位が完全に保持されるとき,はじめて、音楽はカリキュラムの中でふさわしい位置を占める。教育プログラムにおいて音楽は子どもに重要な美的経験を与えるための教科である」[9)]

委員会において音楽は、美的経験をもたらす芸術であり、子どもは、それを自己の表現やコミュニケーションの手段として認識し、用いることができることを求められた。具体的には、自己の精神的感情的内容を音楽にこめて人に伝えたり、他者のそれに対しても共感的に反応したりすることである。音楽表現においては、子どもの感情と直接的に結びついた単純な構造のものから、徐々に美的で芸術的な性格を備えたものへと高められるべきであった。音楽鑑賞においては、いわゆる芸術作品の聴取などにより、常に美的経験を与えられることを求めた。生活における美的経験を重視し、その一つとしての音楽の位置や機能、価値を見いだし、それによってより良い生活を創ることのできる人材を形成するためには、子どもを音楽的に成長させることが必要であるとして、次のように述べている[10)]。

「音楽活動を継続したいという欲求を子どもの内面に喚起するような種類の音楽的経験を効果的に与え、子どもたちに報いることが教師の責任である。子どもたちは音楽的才能や素質において異なっているので、音楽的成長の在り方も多様なものであろう。しかし、子どもは、自己の潜在的能力を最大限実現できるように奨励されるべきである」[11)]

音楽学習指導を行うためには、まず、教師が興味や関心、潜在的能力において多様性をもつ子ども達に応じて、多様な音楽的経験を与えることのできる環境を整え、それによって音楽的表出へと向かうような子どもの内発的衝動を喚起する必要があった。その結果「日々、音楽のある生活を望む」[12)]人間が形成される。ここでの「音楽のある生活」とは、一般的な「表現」や「鑑賞」という音楽活動のみならず、学校内外の音楽（テレビや映画などの大衆音楽も含む）について人と会話をすること、共同体の音楽グループに参加したいと思う気持ちを抱くことなど、幅広い意味をもっていた。また、

学校生活において音楽が効果的に機能するようなあらゆる場面を抽出し，そこで可能な限り音楽経験を組織しようとした。それは、１）学習前の厳粛な雰囲気づくりのために倫理的で愛国的な歌を歌唱すること，２）社会科や文学，科学，美術の領域の学習でそれに寄与するような音楽を取り入れること，３）教室全体の情緒的な雰囲気を調整するために適切な曲を選択しそれを歌唱させたりレコードを聴取させたりすること，４）悪天候の娯楽として音楽を歌唱させ聴取をさせること，５）子どもの諸活動の切り替えを効果的に促し、次の学習へと円滑に展開することができるように音楽を聴取させたり歌唱させたりすること，６）一日の学校生活の終わりに愛唱歌を歌うこと，などであった[13]。それ以外にも、他教科の学習時間に生じた突発的な出来事が音楽学習へと結びつく機会があれば積極的に取り入れるべきであると考えていた。例えば、物語を子どもに読んでいる最中、教室に入ってきた窓ふきが音立てて作業始めると、子ども達の注意がそちらに向けられる。教師は物語を読むのをやめて、子ども達に窓拭きのたてる音のリズムに合わせて足踏みをさせる。さらに、作業の様子を描写した歌詞や「ソミラソミ」のような3つの音高から構成される旋律を創らせたりするなどの活動である[14]。いわゆる「音楽の時間」のみならず、学校生活全般において音楽が効果的に機能するような様々な出来事や機会を捉えて音楽活動をさせて、生活の文脈における音楽の有り様を経験させ、その意味や価値を感受・理解させようとした。こうして、生活における音楽の意味を感受・理解させることによって、音楽に関する活動への欲求が形成され、音楽的成長への道が拓かれると考えていた。委員会は音楽的成長の基盤となる音楽活動について次のように述べている。

「良質な音楽のプログラムは、多様な音楽的活動を通して、音楽的な理解や技術を成長させる機会を与える。それらは、歌唱、器楽活動、聴取、読譜,リズム活動、創造的活動である」[15]

委員会は、生活における自己表現の手段としての音楽の機能を十分に働かせるために必要な活動として、「歌唱」「器楽活動」「聴取」「読譜」「リズム活動」「創造的活動」を設定した。音楽的理解や技術の習得は、あくまでも子どもが各自の潜在的能力に応じて活動に積極的に取り組んだ成果であり、教師はそれを得られるような機会を与えるべきであった。「歌唱」や「聴取」は，文字通りの活動である。「器楽活動」は，楽器を造ったり、演奏したりすることであり，「読譜」は，楽典的な知識を習得する活動であった。

「リズム活動」は、音楽のリズムに合わせた身体表現や、歌や音楽で描写された内容に関する物語などを創りそれを演じるような「劇化」も含んでいた。「創造的活動」は，歌詞や旋律を創作する学習活動であると同時に学習そのものに行き渡る概念とされた。つまり、子どもが自ら積極的に独自の内容をもつ学習を創り上げていくということである。これらの六つの活動は、音楽学習の中で明確に区分されるものではなく総合的融合的な性格のものであった。例えば、ある子どもが「歌唱」している曲に合わせて、他の子どもが、タンバリンやカスタネットなどの打楽器を演奏したり、「リズム活動（身体表現）」を行ったりするなど、一つの学習の中で、同時に展開されるべきものであった。子ども達は、多様な音楽活動の中から、自らの個性や潜在的能力の開発に適するものを選択し、それを創造的に表現しながら音楽的に成長していく。その結果として、子どもは音楽を理解し技術を習得できると考えていたと解される。生活の文脈の中に音楽を位置づけ、その機能を子どもに具体的に提示し、音楽の価値とそれを学習する意義を感受・理解させて内発的衝動を喚起する。そして、それに基づきながら、創造的な音楽学習を展開できるように子どもを成長させようとしていた。

委員会は、学年段階ごとに音楽的成長の領域を明らかにしており，それを表の形にして示すと**表１**のようになる。

表１　音楽的成長の領域

	音楽的成長
幼稚園, 第１学年 第２学年	・子どもたちの環境における響きの音楽的側面や楽音の美しさに関する感受性 ・音楽活動に参加したいと思う欲求 ・表現性や正確さが増すように、効果的に自分の歌唱用の声を使用する能力 ・身体の動きを通して自己を表現する能力 ・音楽を聴取し，敏感にそれに反応する能力 ・音楽的な識別に基づいて，リズム楽器や旋律楽器を演奏する能力
第３学年 第４学年	・輪唱とディスカントを歌唱する能力 ・オートハープを演奏する能力 ・メロディベルとピアノを演奏する能力 ・鍵盤の位置と楽譜を理解すること ・管弦楽曲で演奏される個々の楽器とその表現的効果を聞く能力 ・音楽に合わせて身体的に動く能力 ・簡単なフォークダンスを演じる能力
第５学年 第６学年	・ユニゾン，二部や三部でパートソングを楽しみながら正確に表現的に歌う能力 ・リズムと旋律、和声を理解すること ・楽器を理解し、それらを演奏する能力 ・楽譜を理解し、それらを解釈する能力 ・我が国の音楽を理解すること ― 他国の音楽と関連付けること ・より複雑なフォークダンスを演じる能力
第７学年 第８学年	・広く多様な音楽様式を理解すること ・子どもたち自身が自分の声が開発されていることを意識すること ・声楽と器楽において、正確に自己を表現する能力が増大すること ・共同体の歌唱，ダンスによる劇の社会的側面に興味をもつこと ・楽譜を読む技術力が増大すること ・個人の芸術的行為としての音楽や、マスコミで重視されている社会的な芸術としての音楽を鑑賞すること

（*Teachers Guide to Music in the Elementary School*, California State Department of Education,1963, pp.8-76.より作成）

歌唱領域では，自己の歌うための声を見いだし，単旋律の歌，輪唱や二部，三部の曲を正確に表現的に歌唱する能力，音楽を自己表現の手段として用いる力の形成が目指されている。聴取領域では，簡単な歌や器楽作品を聴取しながらそれに合わせてリズム表現をしたり、楽器を加えてレコードの演奏と一緒に「合奏」したりするなど、様々に反応することが求められている。その後、管弦楽曲で使用されている楽器の形状や演奏方法を理解し，その音色や表現的効果を聴取することを学習する。また，音楽作品を作曲家の人生や人格に基づいた芸術的行為として捉え、彼の当時の生活と関係づけながらその意味を解釈し理解することへと導かれる。芸術作品のみならず、映画やテレビなどで放映される大衆芸術としての音楽をその社会的な意味から解釈し鑑賞することも求められる。器楽活動では，タンバリンやカスタネットなどの打楽器の演奏から，オートハープやメロディベル，ピアノの演奏の学習へと進み，第４・５学年からは，課外で管弦楽器を演奏する経験をもつことが推奨されている。課外で学習された管弦楽器の演奏は、音楽の授業の合奏に取り入れられ、より表現豊かな音楽表現づくりに貢献する。リズム活動では，音楽に合わせてスキップやギャロップなどの身体表現をすることから，一定の身体的表現形式をもつフォークダンスを演じること，複雑な劇をつくりそれを上演することへと学習が進められる。これらは、共同体の社会的行事の中で行われる合唱や劇の上演などへ参加する力の形成に寄与する。読譜では、第二学年まで聴唱を中心としながら、音を図などにより視覚化的に把握し、さらに記譜法を学習した上で、第三学年からは楽譜を読みながら歌う視唱へと導かれる。また、多様な音楽活動を通して、アメリカの音楽を他国の音楽と比較しながらそれぞれの音楽的

特徴や社会的意味を理解することなどが求められる。

幼小接続期にあたる幼稚園や第１・２学年では，生活において様々に生じる音に敏感に気づき反応し、それと比較しながら美的に洗練されたものとして楽音を捉える。その美しさに内発的に動機づけられ音楽活動に参加したいという欲求が生まれる。それは、身体の動きや聴取、歌唱、楽器の演奏という活動へと連なる。何よりも音楽に対して反応することが求められ、その反応の方法は、子どもの個性に応じて様々に選択される活動であるべきであった。生活における音から始まり、それとの連続性を保ちながら，自然に音楽表現へと導くことが意図されている。また、歌唱や器楽活動、聴取という各音楽活動に厳密に区分されず、総合的な表現を目指していた。そうした活動の成果として、音楽的に識別すること、歌唱のための声の発見、発声における正確さや表現性などにも留意されている。

３．幼小接続期の音楽学習―幼稚園，第１・２学年―

委員会は，「歌唱」「器楽活動」「聴取」「読譜」「リズム活動」「創造的活動」の６つの音楽活動を音楽的成長のために必要な活動としたが、それらを導入する段階や組織の方法については、子どもの実態や学習環境に応じて様々になされるものであるとし、学校や教師の裁量に委ねた。しかし、教師のために、音楽学習において多様な音楽活動を組織するための理想的な方法を提示する必要があり，学年段階ごとにいくつかの学習過程を提案している。幼稚園，第１・２学年では，特に子どもの生活における興味・関心などに配慮し、学校生活の他の学習活動との関係性を重視した三つの展開例を示している。それは，１）リズム活動から始める学習，２）歌唱から始める学習，３）楽器演奏から始める学習の三つである。

（１）リズム活動から始める音楽学習

この学習にあたっては，日常から子どもの学校生活や登校時の活動のパターンを観察しておくことが求められる。子どもの生活において，とりわけ遊びの中で見られる身体的動きのパターンを捉え，それを生かしながらリズム活動を組織することが求められている。歌唱や器楽活動における表現と同様に、リズム活動では、音楽の識別・解釈がなされる。音楽に合わせて適切に身体を動かすためには、音楽の特徴を識別し、それに適した動きを創るという解釈が必要となる。学習全体を表の形にして示すと、**表２**のようになる。全体は、幼稚園と第一学年の学習と第二学年の内容、更に前者はその性格に即して大きく三つに分析できるため、表において区分して示している。学習活動としては、リズム活動、歌唱，器楽活動，聴取、読譜が組織されている。

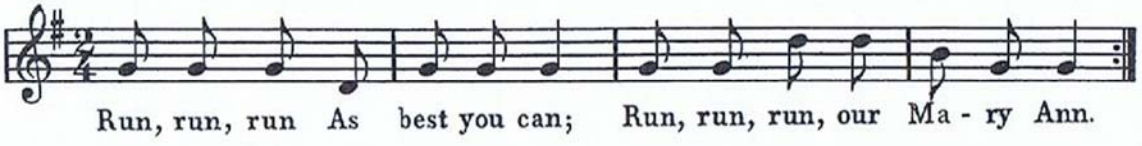
学習全体は、連続する八分音符のリズムパターンの学習となっている。生活の中で子どもが走り回る動きが、器楽活動、言語、歌唱、楽譜によって表現できることを子どもに意識させ、同様のリズムパターンを用いて様々な動物を様々な音の組織によって表現できることを経験させている。そして最終的にはそのパターンを図や音符によって視覚的に把握させることへと導いている。

教師は、子どもの走っている身体の動きの特徴を、大きさ、速度、動き方の視点から分析し、それを音楽的に適切に描写するように、音楽を構成する要素である音量、速度、音高などを調節して演奏する。次に、主和音を構成する音と八分音符から創られている《ジンジャーブレッドマン》の旋律の一部の歌詞を変えて替え歌として歌う。これによって、彼らの動きは、《走る》動きであることを言語的に理解し、それは音高の変化をつけても表現できることを意識する。歌唱とリズム活動（走る）で「合奏」させながら、一方の子ども達は、歌唱の速度の特徴にあわせて身体の動きを制御することを、他の子ども達は自分の歌唱の速度の変化が、身体の動きのどのような変化を描写しているのかについて感受する。

表２　リズム活動から始める音楽学習

幼稚園・第一学年における学習

・一人の子どもを走らせる。
・子どもの走るテンポに合わせて，教師はリズム・スティックやウッド・ブロック，小さなドラムやピアノを演奏する。
・子どもが走っている間，教師は「走る」ための歌を歌う。それは，既習曲の替え歌か，教師の創った全く新しい歌であろう。以下の楽譜は《ジンジャーブレッドマン》の歌に新たな歌詞を即興的に付したものである。



・更に数人の子どもにも，走るように促す。その間，他の子どもには「走る」ための歌を歌わせる。
・歌を速く歌ったり遅く歌ったりすることによって，テンポに対して敏感に反応させる。
・子どもたちにリズム楽器を試させて，走る足の音の響きを最も良く解釈できる楽器を選択させる。
・子どもたちが各自選択したリズム楽器で伴奏させながら，何度も「走る」ための歌を歌わせる。

・「走る」ための歌と同じリズムである《小さな子馬》を新しく学習する歌として導入する。それを学習させることによって，単元のこの内容に関する子どもたちの経験の発展のための土台とする。
・子どもたちに《小さな子馬》のレコードを聴取させて，それが何を語っているのかについて言葉で語らせる。レコードを何度もかけた後、それに対して，子どもたちはどのように反応したのかについて話合わせ歌についての先ほどの質問に答えさせる。
・レコードに合わせて歌わせる。三つのフレーズのどこかの旋律や歌詞の歌唱が困難であれば、その箇所を何度も聴取させたり歌わせたりする。
・子どもたちに、レコードの聴取なしに歌を歌唱させる。その際最初に、メロディベルやピアノ，ピッチパイプでソの音高を与えたのちに、それを「ルー」の言葉で歌わせる。
・「準備―歌唱」という合図か指揮者の合図を使用するなどして歌唱を始めさせる。
・ 歌を上手に歌う方法について，子どもたちと話し合うことによって，彼らの歌唱を改善するための一助とする。
・《小さな子馬》を，レコードの聴取や歌唱，音楽に合わせての身体表現，以前各自で選択したリズム楽器の演奏によって，復習させる。

・イベールの《小さな白いロバ》のレコードを聴取させることによって，「走る」リズムに関する学習経験を与え続ける。教師はレコードをかける前に，この音楽がある動物に関する物語を語っていることを教えそれは，どのような動物で何をしているのかについて説明できるようになることを求める。
・レコードを何度もかけて，ロバの足の動きを表すリズムを暗示している楽器を聴取させる。
・更に，学習活動を補充するとすれば，以下のものであろう。
　劇化　　美術の学習　　創造的な文章づくり

第二学年における学習

・楽譜の学習のために《小さな子馬》の歌を復習させる。
・板書か掲示物によって，子どもたちに，この歌の「走る」リズムを表す記号を見せる。
最初，それは短い横線で表され，後に，実際の音符に変えて示す。

・歌全体の楽譜を，第二学年の教科書か掲示物によって見せる。
教師は，「走る」動きを表す音符を曲の中に見いださせる。

（ *Teachers Guide to Music in the Elementary School*, California State Department of Education,1963,pp.9-12. より作成)

更に、走る動きを想像しながら、リズム・スティックやウッド・ブロックのようなリズム楽器を使用して、それらの動きに適切に対応するような音色をもった楽器を選択し、適切なリズムで演奏する。子ども達は，自由にリズムを創り創造的に表現する。このように、日常的な生活における身体の動きは、言葉（ここでは、走るという言葉）や楽器の演奏、歌唱によって解釈され表わされること、また、

適切な描写のために、様々な音楽表現の在り方を探求する必要があることを感じさせる。

子どもが自由に表現内容と方法を創る活動から、他人の創ったより音楽的に洗練された歌唱の教材曲である《小さな子馬》を学習する。連続する八分音符のパターンのリズムから構成されているが、12小節からなり、和声的にも属七が使用されるなど表現豊かなものとなっている。その曲を聴取し、歌詞を手がかりに子馬がジャンプしたり速歩で動いたりしている様子を描写していることを見いださせる。そのために、レコードを聴取しながら身体的に反応しリズム表現を行う。曲に親しんだ後に、歌唱活動を行い、子ども自身の声色や発声方法などについて意識させる。その際、教師は、歌の開始音を示したり指揮者の合図を使用したりするなど子どもが歌唱しやすいように工夫する。

リズムの側面では、同様の特徴をもってはいるが、曲の構造は複雑で質の高い芸術作品であるイベールの《小さな白いロバ》を聴取し、音楽的側面のみから曲の描写内容や音楽的特徴（連続する八分音符のリズムパターンなど）、演奏されている楽器の音色などを聴取・識別させる。これらの学習は、馬に乗っている騎手を演じたり、ロバや馬の絵を描いたり、それらを題材にした簡単な物語を創ったりするという他の教科の学習内容によって補完される。これによって、子ども達の走る遊びやロバ、馬などについて生活の中で子どもの経験する内容を音楽だけでなく、様々な表現手段によって鑑賞することができる。《小さな子馬》は、第二学年で読譜の学習のための教材となる。曲の一部である連続する八分音符のリズムパターンを同じ長さの線で示し、音の長さを視覚的に意識させ、それを表わす八分音符を学習する。その上で《小さな子馬》を記譜した楽譜を教科書の中から探させる。

生活における子どもや子馬、ロバの走る動きは、連続する八分音符のリズムパターンによって表現されること、また、その速度や音量を変化させることによって、多様な動き方を表現できること、そして、それは、最終的に楽譜へと視覚化して明確に示すことができることを理解する。学習全体は、子どもの遊びに一般的に見られる「走る」動きとの連続性、そして同様の表現手段としての言葉、美術、劇化などとの総合性にも留意しながら、学習できるようになっている。また、子供用の作品から芸術作品へと導くことによって、多様なジャンルの音楽を経験させるとともに、それらを歌唱、聴取、器楽活動、リズム表現、創造的活動をさせることによって多様な音楽活動を組織している。

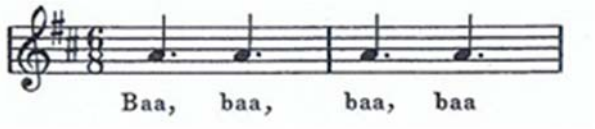
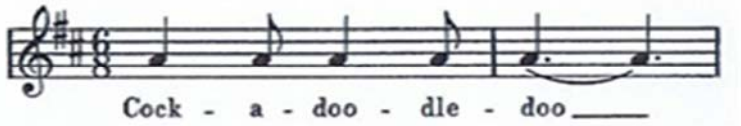
（２）歌唱から始める音楽学習

子どもの歌唱活動は，指導書において最も重視されており、学校生活の中で可能かぎり取り入れられるべきであるとした。それを前提としながら，歌唱活動から始める学習を提案している。それは、大きく幼稚園と第一学年、第一学年と第二学年の二つの内容で構成されているため、それぞれを**表３**、**表４**にして表わしている。

表３では、選定された教材ごとに学習内容が組織されていると分析できるため、三つに区分して示している。農園とそこに住む動物に関する内容が題材とされ、それを描写するような教材が選択されている。既習曲である《小さな谷の農夫》と新しく学習する《農園の朝》の二つの曲は，子どもにふさわしい歌詞や音楽的特徴を有している。犬や猫、ネズミ、羊など子ども達が日常的に生活や物語の中で親しんでいる動物の様子やその鳴き声などが歌詞に描写されており、両方とも、八分の六拍子で四分音符と八分音符から構成される躍動的なリズムが頻繁に使用されている。

学習の導入として既習曲を歌唱した後に、教師の歌唱する曲を聴取したり、子ども自身が歌唱してみたりしながら、歌詞の内容を描写した絵を見て、農園生活の様子を想像し味わう。曲の表現内容に子ども達を親しませた後に、教師は、動物の鳴き声の言葉を付された4小節分の旋律をベルで演奏してみせる。これらの音は羊の声を表わしていることを理解させた後に、この鳴き声のパターンを歌唱する。

表３　歌唱から始める音楽学習（１）

幼稚園・第一学年における学習 ・学習の導入として《小さな谷の農夫》のような農村に関いて歌われた既習曲を歌唱させる。
・今回，新しく学習する曲である《農園の朝》を教師は歌ってみせ，子どもはそれを聴取しながら，歌われている内容を見つけさせる。次に，教師は歌を何度も歌唱しながら、歌で表現されている内容を描いた絵を見せる。 ・子どもたちと教師は，一緒に歌を歌う。 ・教師は，旋律ベルで次のような旋律を演奏する。    ・教師は，これらの音符の表している言葉について質問した後に，この音のパターンを子どもたちに歌唱させる。 ・一人の子どもに，メロディベルでそれらの音符を演奏させる。（特に，上手に歌えない子どもは，喜んでメロディベルを演奏するだろう） ・子どもたちに，農園に住む動物に関する歌詞を創らせる。ただし《農園の朝》で描写されている動物以外のものとする。子どもの興味が続く限り，多くの歌詞を創らせてそれを歌わせる。 それには、必ず雄鶏が含まれるであろう。以下は，その例である。    ・子どもたちが各自選択した動物の鳴き声を歌の歌詞にして歌わせる。 ・歌の旋律の音に合わせて歌うことに困難を感じる子どもには，動物の鳴き声を表す音のパターンをメロディベルで演奏させ，それに合わせて他の子どもたちに歌唱させる。
・サン・サーンスの≪動物の謝肉祭≫から《雌鶏と雄鳥》をレコードで聴取させる。 曲からは、子どもたちの良く知っている「田舎の友達」の様子を聴取できることを知らせ、聴取したことを言葉で表すように指示をする。 ・何度もレコードをかけて次のようなことを聴取させる。 ・雌鶏の鳴き声を表す旋律 ・コケコッコーの鳴き声と，口ばしで何かをついばんでいるような忙しい動きを模倣している箇所 ・雄鶏の鳴き声を表す旋律 ・子どもたちが音楽の描写的な性質を楽しめるように、何度もレコードをかける。

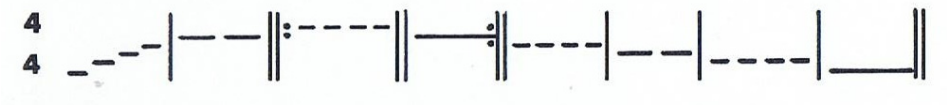
（*Teachers Guide to Music in the Elementary School*,California State Department of Education,1963,pp.15-19.
より作成）

一人の子どもにはそのパターンをベルで演奏させて、残りの子ども達はそれに合わせて歌唱して、合奏を行う。その際、上手に歌唱できない子どもが楽器を担当する。次に、子ども達が興味・関心のある農園の様々な動物とそれらの鳴き声を選択させて替え歌を創る。これによって、歌で伝える内容を子ども自身のものとすることができるので、他人の音楽ではなく自分の音楽とすることができる。選択された動物の鳴き声に合わせて、ラのみで構成される2小節の節をアレンジさせるが、鳴き声については、言葉の抑揚がおのずとリズムパターンを示唆するので、子ども達は簡単に自分の動物の鳴き声を創ることができる。子どもに自分の創作したリズムで歌わせる。先ほどと同様に、歌うことに難のある子どもには代わりにメロディベルを演奏させる一方で、他の子どもが鳴き声の歌詞を歌う。

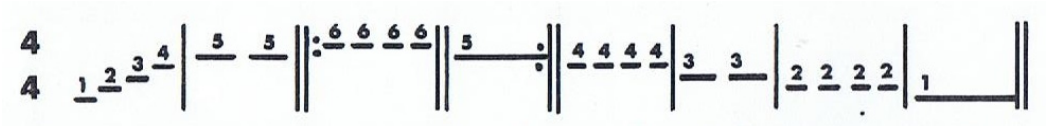
表４　歌唱から始める音楽学習（２）

第一学年，第二学年における学習

・教師は，子ども達に何度も歌を歌わせた後に，メロディベルで演奏させることによって，歌の旋律の輪郭を心に描かせる。
・教師は，《小さなアヒルの子》を歌いながらメロディベルを演奏し，子ども達にそれを聴取させる。次に，子どもたちに，歌から学んだことを発言させる。
・教師は何度もそれを歌ったり演奏したりした後に，子どもたちにも歌わせる。
・子どもたちに歌を歌わせながら，手を上下させることによって旋律の輪郭を示させる。
・教師は，旋律の上下の動きを表す図を黒板に書くことによって子どもたちにその意味を理解させる。

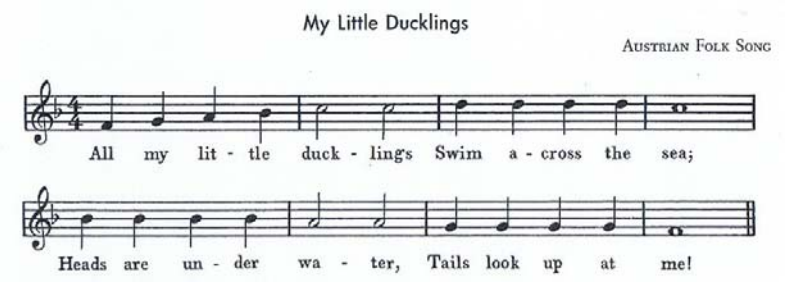


・別の機会に《小さなアヒルの子》の歌を復習する。
・教師は，旋律ベルを垂直に構えながら，《小さなアヒルの子》を演奏し，子どもたちに聴取させる。
・教師のメロディベルの演奏は、歌で多様な音高が使用されていることを見いだすことができる。
・メロディベルで音階を演奏し、その各音に対応する数字をチョークで書く。
次に子どもたちの歌った旋律の図の上にチョークで数字を書く。



・ある子どもに，オートハープかピアノによって歌の旋律を演奏させる。その後，クラス全体に歌を歌唱させながら，伴奏させる。
・教師がメロディベルで歌を演奏している間、その音に対応する音階の数字（或いはシラブル）を指さしさせる。
・数人の子どもにはメロディベルで歌を演奏させ、残りの子どもたちはそれに合わせて音階の数字（あるいはシラブル）で歌唱させる。
・六つの音からなる音階を歌の導入として子どもに演奏させ、その後クラスは歌を始める。
さらに、ピアノかオートハープで，その歌唱に伴奏をつける。
・子どもたちの歌唱を改善する一助となるように歌を表現的に歌う方法について話し合う。
・黒板に掲げられた図か教科書に掲載された《小さなアヒルの子》の楽譜を見せながら学習を進める。

・言葉や数字，シラブルやアルファベットの文字で歌を歌いながら，曲を表した図や楽譜を目で追わせる。その目的は，旋律を構成する音の上下の動きを目で追わせることによって子どもたちに旋律について考えさせるためである。



（*Teachers Guide to Music in the Elementary School*,California State Department of Education,1963, pp.15-19より作成）

歌唱曲と同様に動物の鳴き声などを描写した芸術作品である《雌鶏と雄鶏》の曲を聴取させる。音楽のみを手がかりに、曲の描写的な内容（雌鶏と雄鳥の鳴き声、口ばしで餌などをついばんでいるような動き）を聴取し、それを言葉で表わす。連続する八分音符の連打が鳴き声を、該当部分で使用されている楽器の音色や音域は、雄鳥と雌鶏の鳴き声を暗示している。

学習全体は、既成の曲の一部を替え歌にして、歌詞やリズムを創るという創造的活動を行っている。それによって、同じ曲でも歌詞を替えたりリズムを替えたりして様々な動物を表現できることを理解している。また、子ども用の簡単な歌唱曲から芸術作品の聴取へと導くとともに、最終的には音楽の響きの特徴のみを手がかりにその描写内容を解釈できるようになっている。曲の表現内容を学習の中核とした学習が展開されている。

これらの学習を基盤にして、**表４**の内容が指導される。同様に、子ども達が親しみをもてる動物であるアヒルに関する歌詞を有し、六つの音高と四分音符と二分音符、全音符から構成される単純なリズムが特徴的な曲が教材とされる。学習全体は、手を上下される身体表現、旋律を言葉や数字、シラブル、アルファベットの文字で歌唱すること、メロディベルの演奏などの多様な音楽活動を通して、曲の音高とリズムを図や記号、文字で視覚化して明確に把握させている。

曲の旋律は，前半は上行する、後半は下降する順次進行で構成されており、後半の水の中に深くもぐる様子を描写した歌詞が音高の下降を示唆するようになっている。教師が何度も行う歌唱や演奏を聴取することによって、曲の全体像を把握した後に、子ども達は，それを歌唱する。更に、旋律の音高の上下とリズムの特徴を手の上下の位置と動かし方によって身体的に表現しながら歌唱し、旋律の音高やリズムの響きを、視覚化・身体化して感受する。その旋律は、音高とリズムを表わす図によって視覚的に示され、旋律の音高とリズムを明確に把握する。それを踏まえた上で、今後は、その音板の上下の位置が音高の上下関係と一致するようにメロディベルを垂直に縦に構えて、音で表わされる音高とそれらが視覚的に示される上下関係を結びつけて把握できるようにさせる。身体表現や図によって示されてきた音高を、順に音階として記譜しそれに数字を付すことによって、ヘ長調の音階におけるその音の位置を理解させる。教師が曲の旋律をメロディベルで演奏している間、子どもはその響きに対応する音階の数字を指さす。また、子ども達がメロディベルの演奏と音階の数字の歌唱を分担して表現する。ある程度、曲の音高の動きを把握できた頃に、更に曲を豊かに表現するための方法を使用する。それは、歌の導入部分として6つの音からなる音階を付けること、ピアノかオートハープによる伴奏をつけることなどである。更に歌唱の質の改善のための方法についても話し合わせる。一般的には，上行する音高はクレシェンドに、下降する場合は、デクレシェンドで歌うこと、歌う時の声音などに関する工夫が求められると思われる。教材曲の音高を数字、ドレミ、アルファベット、楽譜など様々な表現手段に置き換えて示すことによって、旋律の音高の組織に関する概念が明確に形成されることになる。

学習全体は、旋律の音高とリズムの特徴を身体表現や図や記号、文字によって視覚化した後に、最終的には楽譜で把握することを求められる。また、曲はどのように工夫すれば、より表現的に質の高いものとなるのか、その方法について常に考えなければならないこと、またそのための方法についても知ることになる。

（３）楽器の演奏から始める音楽学習

器楽活動については、楽器づくりと演奏の二つの領域から構成されるが、ここでは前者は扱われておらず、演奏のみが組織されている。学習全体は、幼稚園と第一学年，第一学年と第二学年の二つに分けて示されているため、それぞれ**表５と表６**に示している。更に学習活動全体は、教材ごとに組織されていると分析されるため、区切りに線を引いて分類している。学習全体を通して、クリスマスという生活行事を中心としながら、その際に教会や共同体での活動の中で様々に使用される鐘についての学習がなされている。学習活動の中心はリズム活動である劇化を中心としながら、物語の場面の折々で使用される鐘状楽器の種類や、それぞれの音色や音高、音量などの特徴を識別し探求している。

また、鐘の音を旋律楽器で模倣して演奏するための方法も教えられている。

表５では、クリスマスにまつわる歌に描写された内容を劇化する活動が中心となる。「音楽センター」は、様々な楽器の置かれた場所であり、そこで子どもたちは、それらの演奏方法や音色を探求する。ここでは、鐘状の様々な種類の楽器が配置されており、子どもは、試行錯誤しながら演奏してそれらの音の特徴を探求する。更に、学校のみならず家庭生活において存在している鐘状の楽器を探し、生活のどのような場所や場面でそれらが用いられているのかに気づく。それは、家庭での玄関や時計のベルや、電話の呼び出し音などであろう。音楽の時間には、様々な種類の鐘状の楽器を演奏し、それらの音を聴取しながら、音高、音色、音量などの視点から響きの特徴を、言葉、特に擬音語を用いながら明確にする。次に《ジングルベル》の歌の内容を描写した絵を見せながら、そこで描かれている具体的な内容やそれに付随する音の特徴を、音色やリズム、音量などの視点から話し合わせる。それらの内容に適した楽器であるベルやココナッツシェル、サンドブロックなどを選択させ、その演奏の方法を試させた後に、曲を歌いながら自分の選択した楽器で伴奏をつける。楽器の音色と演奏方法の選択は、曲を子どもなりに解釈していることになる。次に、曲の描写内容や八分音符や十六分音符の躍動的なリズムを手がかりにソリ乗りの様子を身体表現によって劇化する。馬や乗り手、ソリなど各キャラクターに特徴的な動きを確定し、ソリのベルや馬のひづめの音、そしてソリの響きをどのように組み合わせて伴奏を創り劇化するのか考えさせることになる。子どもたちは，分担しながら、歌唱し、適切な楽器で伴奏をし、身体表現する。

その後、《サンタのソリ》の歌を学習する。歌の歌詞は、「サンタがトナカイの引くソリに乗って鈴をならしながら子どもの待つクリスマスツリーの下に本やおもちゃや可愛い物を持ってくる」という内容のものであり、4小節から構成される短い曲である。子どもは、曲の描写内容や音楽的特徴を識別し、それに適したベルを選択し、ふさわしい響きを創るように工夫する。そして曲を歌いながら伴奏をつける。曲は、主和音のみで構成されているため、鈴の鳴る様子を描写するために、楽譜にあるようなC♯とDを同時に演奏するような伴奏もつけることができる。楽器の伴奏を付ければ曲はより表現豊かに楽しめるものであることを子どもは感じるだろう。曲の劇化のために、歌詞の内容を解釈させて、登場人物や物語を考えさせ、各自担当する役柄を決定する。役柄の身体的な動きや具体的な活動内容などを創り、それをより効果的に演出するための音楽的効果を創るために、様々な楽器の音色を探求し選択することになる。その際、サンドブロックやココナッツシェル、タンバリンなどの打楽器や有音楽器も使用される。子ども達は、役柄を演じること、歌を歌うこと、楽器を演奏することなどの活動を分担して行い、劇を上演する。

その後《ベルの伝説》という曲を聴取し、曲の各部分の音楽的特徴や演奏されている鐘の音色や音量を識別聴取し、レコードに合わせて様々な鐘状の楽器を演奏する。

学習全体は、クリスマスを題材にした歌曲の描写内容を解釈して、劇化することによって、クリスマスに関する経験を単純化し再構成している。具体的な出来事や場面に登場するキャラクターやそれに付随する身体的動きや音、それらの特徴に気づき、それを模倣して演奏する方法を探求するようになっている。そのためには、日常的に、様々な楽器が置かれており、子どもがそれで遊びながら音色や音量などの特徴を試せるようないわゆる「音楽センター」が必要となる。

表６は、主として、第二学年の学習である。ここでは、4小節の長さで下降するハ長調の音階の反復によって構成された歌である《クリスマスの鐘》の学習が中心となる。

表５　楽器の演奏から始める音楽学習（１）

幼稚園、第一学年における学習

・「音楽センター」に鐘状の楽器を配置する。
・ 教師は，様々な楽器を演奏してみせ，子ども達に同じ種類の楽器を学校に持ってくるように勧める。
・ 課外活動の時間に，鐘状の楽器の演奏を試すための機会を与える。
・ 音の違いを聴取するように指示をする。
　・音は高いのか，低いのか。
　・音量は大きいのか，小さいのか。
　・音はどのように響いているのか。リンリン，チンチン，ガンガンなど。

・《ジングルベル》の歌を描写した絵を子どもたちに見せて，次のようことを話し合わせる。
　・引き具についたベルの種類、それらが発する音の種類
　・ソリで走っている人や馬が雪の上を静かに速やかにシュッシュと音をたてて風をきる様子
　・雪によって消される馬のひづめの音
・子どもたちに，楽器を試させて，最も適した響きの効果を得られる楽器を見つけさせる。
　（ソリについたベル，馬のひづめの音を模倣するココナッツシェル，ソリの響きを模倣するために円を描くように演奏されるサンドブロック）
・子どもたちに《ジングルベル》を歌わせながら，各自で選択した楽器で伴奏をつける。
・ソリ乗りを劇化するための計画を立てさせる。そのためには，馬やソリ，運転手や乗り手を表現する方法を考える必要がある。
・子どもたちに歌を劇化させる。その際、歌を歌うこと、適切な楽器の演奏で伴奏をつけるなど、分担して行う。

・新しい歌である《サンタのソリ》を子どもたちに歌ってみせる。
・歌を何回も歌ってみせる間、子どもたちは各自で様々な種類のベルを選択し演奏する。その間に、歌に最も適した響きを各自で見いだす。
・歌を歌わせながら各自のベルで伴奏をつけるように促す。
・後の学習で，《サンタのソリ》の歌を復習する機会を与える。
・子どもたちに次のようなことを発見させる。つまり，ピアノかメロディベルでC♯とDの音を同時に演奏することによって，旋律楽器は，ベルの音が鳴る様子を模倣できるということである。それは次のように記譜されるだろう。

・子どもたちに歌を歌唱させている間、数人の子どもたちには，ベルの音を創らせて演奏させる。
・歌を劇化するための計画を立てさせる。次のような役柄を演じる子どもを選出させる。
　サンタ，サンタ夫人，トナカイ，サンタの助手，きらきら星，
　空をめぐる月，降雪，眠る子どもたち，ソリ，風
・物語に暗示されている動きや活動を作らせる。
・作った動きや活動を伴奏するような興味深い効果を創らせる。
　・雪の中を走っているソリの乗り手を模倣するために，サンドブロックを丸く廻しながらこする。
　・雪によってかき消されたトナカイのひづめの音を模倣するために，胸か膝の位置で，ココナッツシェルを叩く。
　・タンバリンか鈴のついた腕輪を振ったり，メロディベルを演奏したりして，サンタの助手の発する音を模倣する。
・数人の子どもたちに歌を劇化させる。他の子どもたちには分担して歌を歌わせたり，楽器で効果音を演奏させたりする。

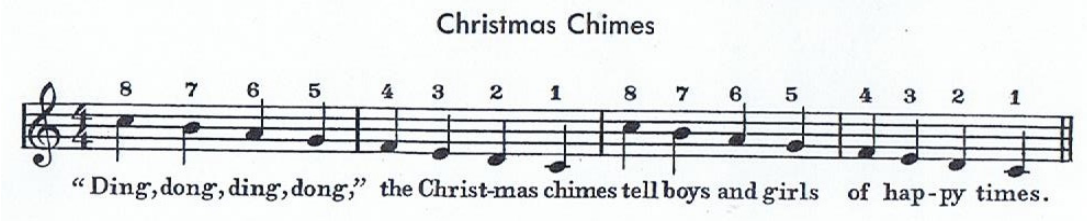
・多様なベルの音を聴く経験を子どもたちに与えるために，《ベルの伝説》のレコードをかける。
・作品の二つのセクションでは異なるベルが演奏されており、それらの音を聴き取らせる。
　セクション１：大きなベル，　セクション２：小さなベル
・子どもたちに各セクションの特徴を考えさせて，それぞれのベルが演奏される回数を確定させる。
・大小それぞれのベルを劇化させる。子どもに、様々な種類の鐘状楽器の中から適したものを各自で選択させ演奏させる。

（*Teachers Guide to Music in the Elementary School*, California State Department of Education,1963,pp.21-26. より作成）

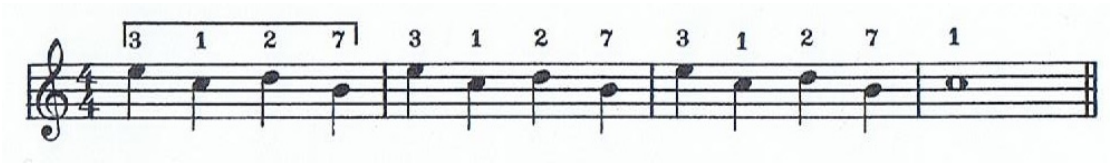
表６　楽器の演奏から始める音楽学習（２）

第一学年，第二学年における学習

・《小さなアヒルの子》と同様の方法で，《クリスマスの鐘（Christmas Chimes）》を教える。
・歌をメロディベルで各自演奏させる。
・一人の子どもがメロディベルで歌を演奏させている間，他の子どもたちには歌の楽譜を見せる。それによって，楽譜に記載された下降する旋律に気づく。



・歌の導入部分として，次のような旋律を演奏させる。その中の反復するパターンを観察させる。



・クラス全体に繰り返し歌を歌わせる。その際、一人の子どもには導入部分とコーダの部分を演奏させる。

・後の学習で，管弦楽作品である《ウィーンの音楽時計》のレコードを子どもたちに聴取させて，その中で作曲家が様々なベルを使用している方法について識別させる。
・音楽の印象について子どもたちと話し合う。次のようなことを聴取するだろう。
　・作品の開始部で演奏される大きなベル
　・オルゴールを表現している小さなベル
　・トランペットによって演奏される召集ラッパの号音
　・おもちゃの兵隊のパレードを暗示しているスネアドラムによる行進のリズムの演奏
　・音量の大小
・この音楽は，ウィーン皇帝の宮殿にある有名な音楽時計を描写していることを子ども達に話すことによって，音楽に対する印象を強める。この時計では、小さなおもちゃの兵隊が現れて，硬直したようなリズムで周りをくるくると行進する。
・レコードを何回もかけて，音楽を解釈させる。時計の打つ様子や，おもちゃの兵隊のパレードをパントマイムで演じさせる。

（*Teachers Guide to Music in the Elementary School*, California State Department of Education,1963,pp.21-26.
より作成 ）

まず、教師によるメロディベルの演奏を聴取し、旋律の輪郭を手の上下の位置や図式によって視覚的に理解した後に、楽譜を見る。次に、数字やドレミ、アルファベットの文字で旋律を歌い、音高を把握する。その後、子ども自身が、楽譜を見ながらメロディベルで演奏したり、歌唱したりする。音階の音高の上下を音符の上下の位置や数字と対応させることによって旋律の特徴は明確に理解される。歌の導入部と終結部に、鐘の音を描写したような反復するパターンから構成されるフレーズを加えて演奏する。それによって、曲をより表現的に演奏することができるようになる。メロディベルの演奏と歌唱を分担しながら，子どもは曲を表現する。最後に、芸術作品である《ウィーンの音楽時計》のレコードを聴取させ、音楽のみを手がかりに，作品の中で鐘状の楽器がどのように使用されているのか、また，描写されている具体的な内容とそれを表現している楽器、それらの演奏方法などについて話し合う。さらに作品に関する知識を習得し、レコードを聴取しながら、曲の表現する内容について場面ごとにパントマイムによって音楽を解釈する。

楽器の演奏から始められる音楽学習では，生活における鐘の音探しから始まり，様々な鐘状楽器の音の特徴を識別させることから，徐々に様々な楽器の形状や音色，演奏方法を体験させ，身体表現や劇づくりなどのリズム活動を中心とした内容と関連させながら，曲に描写された生活における具体的事象が楽器の演奏によってどのように効果的に伝えることができるのかについて、子どもに意識させるものとなっていた。また，歌唱や創造的活動など様々な音楽活動との関係において、楽器の演奏がどのように音楽表現を豊かにすることができるのか、様々な方法を幾つかの教材を通して子どもに感じさせるものとなっていた。

４．おわりに

以上考察してきたように，カリフォルニア州の指導書における音楽学習は、各発達段階の子どもの潜在的能力に即しながら、各個人に応じて音楽的成長を促すような学習の内容と方法を提案していた。当時の音楽学習では、歌唱や器楽などの各音楽活動が独立的に組織されており，そのため各活動の技術教育に拘泥しているとの批判を受けていた。とりわけ，読譜の指導では，音とリズムの概念が形成されないままに、それを表す記号のみが教えられているという問題も抱えていた。音とリズムの概念の形成にあたっては，生活において最初に音を体験する幼少期が最も重要となる。さらにそれを基盤としながら幼小連携を踏まえて幼稚園から初等教育段階に至る統一的な学習組織が求められる。指導書では，これを踏まえて内容を組織していた。

指導書における幼小接続期における音楽学習では，生活内容が表現された曲の描写的内容を学習の根幹としながら，それを身体、美術、物語、劇など様々な表現媒体で経験させること、様々な音楽活動や合奏によって経験させることによって、生活内容との密接した関係性を保っていた。子どもは，生活における音や音楽の意味と機能を実感し、曲をめぐって様々な活動を展開できることを知り、その中から自分にとって最も意義のあるものを選択することができた。とりわけ、「リズム活動」における身体表現や劇化は、総合的な生活を単純化して再構成する活動であり、幼小接続期から初等教育にいたるまで継続的に行われるべきものであった。また、生活における活動との関連から音やリズムの概念を形成し，それを記譜のための記号へ置き換えるための連続的な学習が展開されていた。音楽的知識や技能は、意欲的に活動に取り組んだ成果であり、あくまでも、子どもの興味・関心に基づいて、学校内外の生活の様々な場面で、可能な限り積極的に音楽に関わる活動に取り組もうとする態度が重視された。カリフォルニア州の指導書で展開された生活主義の原理に基づく音楽学習は、幼小接続をめぐる問題に対して、一つの示唆を与えるものとなってはいないだろうか。

注

1）倉沢　剛『近代カリキュラム』誠文堂新光社 1948年
倉沢　剛『米国カリキュラム研究史』風間書房 1985年
L.B.ピッツ著 高萩保治訳『音楽のカリキュラム』目黒書店 1951年
川口さやか「米国1940年代の米国初等音楽科教科書における読譜の教育課程―1920年代との比較を通して―」広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第56号 2007年
武内裕明「教科書双書*The Music Hour*（1927-1931）の音楽鑑賞教育－1920年代の米国初等音楽教科書との比較を通じて－」広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第57号 2008年
拙稿「アメリカにおける生活主義音楽教育の展開（1）－音楽教科書『我々の歌う世界』の学習内容と方法－」佐賀大学教育実践研究 第33号 2016年
拙稿「L.B.ピッツの音楽科教育論－中等教育を中心に－」佐賀大学教育実践研究 第35号 2017年

２）Mark,M.L.et.al.,A History of American Music Education Third Edition, R&L Education, MENC, 2007.
武内裕明「米国における幼稚園用の歌の本の発展の意義－20世紀初頭のVandewalkerとHillの見解の比較を通じて－」広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 ＸＸⅣ 2012年

３）Morgan,H.N. et.al., *Music in American Education*, Music Education Source Book No.2, MENC,1955.
奥田 修史「1890年～1910年代のアメリカにおける幼小接続と幼稚園教育の学校化」『学校経営学論集』第７巻 2019年 12－22頁
橋川喜美代「米国の幼児教育改革に見る幼稚園・低学年統合カリキュラムの問題点と課題」『カリキュラム研究』第3号 1994年

４）佐藤　学『米国カリキュラム改造史研究』東京大学出版会 1990年
拙稿「生活主義音楽学習指導の論理－カリフォルニア州初等音楽教育委員会報告を手がかりとして－」佐賀大学教育実践研究 第32号 2015年
拙稿「生活主義教育における「統合」領域と音楽科－1940年代ロングビーチ市を中心として－」佐賀大学教育実践研究 第39号 2019年

５）*Teachers Guide to Music in the Elementary School,* California State Department of Education,1963.
書名は，初等教育であるが，幼稚園の内容も含められている。

６）いくつかの音楽教科書を挙げているが、マーセルが編集に関わっている教科書を中心としている。
Mursell,J.L.et al., *Music For Living Series*, Books for Grade One to Six, Silver Burdett Co.,1958.
McConathy,O. et.al., Music for Early Childhood , California State Series,Silver Burdett Co.,1960.

７）*Teachers Guide to Music in the Elementary School,* California State Department of Education,1963,p.1.

８）ibid.,p.3.

９）ibid.,p.4.

10）マーセルの理論から影響を受けていると思われる。
J. L. マーセル　美田節子訳『音楽的成長のための教育』音楽之友社 1990年

11）*Teachers Guide to Music in the Elementary School,* California State Department of Education,1963,ibid.,p.2.

12）ibid.,p.131.

13）ibid.,p.3.

14）McConathy,O. et.al., *Music for Early Childhood* , California State Series,Silver Burdett Co.,1960.

15）ibid.,p.131.

付記：本研究は，科学研究費補助金（研究課題番号20K02889）の助成を受けたものである。